図書館ニュース

No. 5
1967
42・6・10・発行
発行人 園田 義道

発行所 東京都文京区白山5丁目28番の20号 東洋大学附属図書館

源三位頼政集 巻頭(右)・巻末及び奥書(左)

三度図書館長となって

図書館長 園田 義道

昨年度末をもって図書館長を二期、四年間勤めあげたので、やっと解放してもらえると思ったのに、とうとう詰め腹ならぬ膝詰の談判で、承知の口上を切らされてしまった、さらに二年間館長の重責がのしかかってくるわけである。

最初の二年間は先輩の方針を踏襲してほぼ大過なく過し得たが、この間右も左も分らぬ新前として図書館の勉強に費したことであった。次の任期中には新しい施策を少しく打出し少しばかり成果を収め得たと思うが、実は本学自体の実力向上が舞台そのものであり、関係者の協演があったればこそのことで、成果などと口はばったいことを言うのは演出者の思い上がりであるかも知れない。

図書館の運営方針は、大学全体の教育・研究方針の基礎の上に確立さるべきものと思う。特に私学はその私学ならではの特色を発揮し得るところに特別の存在価値を持つ。図書館は原理篇に続く特論の一つであって、本が立てば館の方針は自ら定ってくる。それを実施に移すにあたっては種々の行き方があり、立案の適不適、施策の巧拙の区別が生ずるであろう。ここに図書館長の仕事がまち受けており、努力を傾注する場所があると思う。しかし現在は未だ本来の仕事以外のものがのしかかって来る場合が多いのである。主脳部の御努力と図書館に対する理解には大いに敬意を表するが、竿頭更らに一歩を進めていただきたいと思う。

私共の専門分野である通信工学の中に情報理論といふのがある。これは情報を電子的手段で伝送しようとする場合、妨害になる雑音との関係を論ずる極めて数学的な理論体系であるが、その中に冗長度といふ概念が出て来る。厳密な定義はさておき、今電信の符号構成を考へた場合通常マークかスペース（パルスのあるなし）五単位で一字が構成されるが、適当な配慮のもとに六単位にして、伝送途中で誤りを生じれば、自働的にこれを検出して機械を停止させる。さらに七単位にすれば自分で誤りを訂正して、自働的に正しい字をタイプに打たせる高度な仕事をなし得る。この場合単位が増すから伝送速度が落ちることは止むを得ない。冗長度とは情報を伝へるのに不必要な冗長さの度合を云ふわけであるが、これを適当に利用すれば安定な無誤字通信が出来るのである。この冗長度の概念は学校経営の上にも暗示深い示唆を与へる。良い学校を作ろうとする場合、経営当面の教育施策を軽視しては勿論成立しないが、それだけでは大学は亡びる。当然研究といふ冗長度を重視しなければ安定な誤りを自己訂正出来る経営は成立しないであろう。近年分館の図書予算が比格的恵まれた状況にあるのは、経営理念の早急な実現を計る拙速主義の時代を脱し、冗長度を入れた安定した時期に来たものとして喜ぶべき事であるが、今一つ図書陣容の拡充についても考へねばならぬ時期が来ているように思ふ。

情報理論について今一つ考へさせられる事がある。誤りの自己訂正とは伝送途中における訂正であって、原始の情報の質的な（内容）誤りは如何ともなし難い。同様に経営者のフィロソフィーの誤りは如何なる施策も如何ともなし難い。幸い私共工学部は良い指導者層を与へられ、産学協同を経営理念として今日まで順調な歩みを続けて来て居ることは誠に幸なことである。が、これを図書館分館運営の理念として如何に結実化して行くかは今後の課題であろう。この事に対する私見を本館と対比しつつ、多少の誇張を許して頂いて述べて見たい。

図書館分館について思ふこと

田中平次郎

前月号図書館ニュースを見てもすぐ分る様に古書、稀覯本の所蔵は本館にとっては極めて重要なことであると思ふ。しかし日進月歩の工学図書にとって十年たてば古典であり、二十年たてば歴史資料にしかならぬのが実な情である。その量も産業の発展と共に益々膨大とり、このための書庫をいくら拡充しても手狭になる恐れを生ずる。従って図書の管理、サービスの面でも工学部の教育研究に密着して一工夫しなければならぬ時が来ると思ふ。例へば古い図書は思切ってマイクロ化したり、場合によっては廃棄する大英断を必要とするだろうし、複写サービスを拡充して、研究室にはコッピーをおき、用が終れば早く捨てる。床面積の償却費はコッピー代より高いといふ考え方の徹底も必要だろうし、また将来研究面に対しての文献索引に対するコムピューターサービスを考へれば、買った図書をバラバラにして再分類しなければならぬ時代が来るかも知れない。若しその様な方針が分館から打出された場合徒らに規定を楯に批判するのでなく、分館の特殊性と目的とを正しく理解して頂きたいと心から願ふ次第である。その意味では分館はもはや古典的な図書館ではなく、正にインダストリヤルライブラリーに発展しなければならぬし、それが産学協同の理念に連る道であると信ずる。

（完）

（工学部教授）

分館だより！

緑に囲まれた工学部分館では、静かな環境の中で学生達が勉学に励んでいます。この教室を改造した図書館に移ってから三年目、蔵書数はもちろん利用者数も年々増え館員一同うれしい悲鳴をあげています。しかしそれに伴い館内の狭さと人員不足が痛切に感じられ、新図書館建設が一日も早く実現する事が望まれます。やがては社会に出て活躍する学生達に在学中一冊でも多くの図書を読んでもらいたいと思い、いつの日か充分なサービス活動が出来る日がくる事を話し合いながら皆で協力しあって頑張っています。最後に特記すべき事は複写サービスの一つである〝ゼロックス〟が二十五円に値下げになりました。今後も多いに御利用下さい。

松永友代記

図書館の利用について

村松正俊

学者や作家などには、図書館を利用しないで、自分の手許に文献を置いておく人と、図書館を利用する人と二種類ある。これは人それぞれの性格だから、善い悪いは言えない。便利という点から言っても、どちらにも一長一短があり、容易に事はきめられない。手許に本があれば、これに越したことはないが、それも何も自宅に限ったわけでもなかろうし、図書館の一室にいる方が、もっと手近かに本が見られるというものだ。

また国々の習慣によっても違うだろう。森鷗外は、渋江抽斎の何処かで、自分は図書館をつかわないので、ついまだ見ていないと、ある本のことに就いて述べている。ロマン・ロランは自宅には、本を置いてないで、図書館で仕事をする癖があると、ある人が言っていたが、これも個人のくせもあるかも知れないが、あるいは国々の習慣によるところも多いと思われる。大体、日本では個人が本を蒐集して自分で使用するという方が多いが、ヨーロッパでは、公共の図書館で珍書奇書を調べ直すというふうがあるようだ。

その日本人の癖だが、これが困ることの一つにもなる。ある大学で、重要な外国の紀要を取り寄せる。すると他の大学も負けじとばかり、それを買うという工合に、蒐集の競争のようなことも起る。事実あったことだが、ある国立大学で、図書館が一部を買う。ところがそれとは別に、研究室が、それも一つではない、ちがう学科の五つの研究室がそれぞれ、その本を買ったという。そのくせ、図書費が足りない、足りないと言っているのだ。

これなど、各大学の図書館の内で交流し、学内でも交流するようにすれば、貧弱な図書費をむだに国外に流出させることもなくなるというものだが、さてその交流の方法の具体的なやり方は？となると、また困難の点のあることは否めない。だが、個人本位より図書館を利用するくせをつけるのはいいことだと思う。

（文学部長）

仏教図書館協会・総会開かる

第八回　仏教図書館協会の総会が、五月二十九日、日本の仏教系十三大学の図書館関係者を集め、駒沢大学で開催され、本館から梅沢係長が出席した。

図書館の動き

図書館事務分掌改善

望月武夫

図書館業務を大別すると、基本的には、総務・整理・奉仕の三分野に分けられ、これ等の持つ機能を有機的に運営することにより、大学本来の目的を達成させる中枢機関としての図書館の使命が果されるのであるが、それには勿論、施設、設備、職員構成等、総ての点に渡る必要条件が満たされない限りにおいては、無理な事柄であろう。

今回、過度的段階として、左記の通り総務、奉仕を一緒にした図書課と、整理課の二本建てによる図書館の事務分掌が改善された。（五月二十三日、於常務理事会）

然しこれ等分掌事項については、問題点が多く残されており、今後更に図書館の業務分析を行い、十分検討し、近き将来建築されるであろう近代的設備をもつ図書館の落成までには円滑な運営を計り得る組織体制を作り上げ、図書館が大学の進展に遅れを取らない様にしなければ、大学図書館としての機能的役割を十分果たし得ないと思われるので、関係者の協力をお願いします。

図書課の分掌事項

一、図書及びその他の資料（以下図書と称する）の発注、受入、登録に関する事項。

二、図書館運営委員会、並びに諸会議に関する事項。

三、図書館情報、並びに宣伝に関する事項。

四、諸印章の保管に関する事項。

五、館内の庶務に関する事項。

六、図書の製本に関する事項。

七、図書の配架に関する事項。

八、図書の閲覧、貸出しに関する事項。

九、レファレンスに関する事項。

十、図書の管理、保管に関する事項。

十一、複写作業に関する事項。

十二、工学部分館、連絡事務に関する事項。

整理課の分掌事項。

一、分類、目録に関する事項。

二、図書の装備に関する事項。

三、目録編成に関する事項。

四、目録カードの印刷に関する事項。

（図書課長）

蔵書の中から

百姓一揆の年次的研究（青木虹二著）

一九五五年度の社会経済史学大会は「幕末の農民一揆」を共通論題としてとりあげた。それを前後して戦後の近世社会経済史研究のなかで農民一揆の研究・論文はもっとも数多く発表されたものの一つである。

わが国の一揆に関する学問的研究の開始は大正中期頃からであってロシア革命・米騒動などの社会運動に関連して展開されたものである。とくに戦前に代表されるものには黒正厳の「百姓一揆の研究（昭和三年、岩波書店）」、同「百姓一揆概観及年表（昭和一二年、日本評論社）」と小野武夫の「農村社会史論講（昭和二年、厳松堂）」同「徳川時代百姓一揆叢談上・下（昭和二年、刀江書院）」とであり、前者は一揆を年代・地域・種類・規模別に全地域・全時代的に集録されたものに対して、後者は一揆を農村構造との関連で総合的にとらえたもので両者とも一揆に関する研究上貴重な財産である。そしてこの研究は封建社会の崩壊過程の位置づけとなり、その後の論争の出発点となったものである。前者は一揆の性格を崩壊の派生的な現象であって、盲目的で爆発的であって高く評価しないという立場をとり、後者は維新期の歴史をうごかす革命性をもっていたといった。そしてその後、佐野学、野呂栄太郎、羽仁五郎、服部之総などによるいわゆる「階級闘争」まで発展したのである。

戦後の研究のなかで一揆の形態を歴史の諸段階と対応させて体系化したのは林基の「百姓一揆の伝統（昭和三〇年、未来社）」がある。これは研究史、問題点を大きくとりあげ発展させたものである。

これら戦前、戦後の研究のなかで全国的大量的個別的なそして年表と付加した研究はさきにのべた黒正の「百姓一揆の研究」であるが、とくに戦後、そのなかでも最近の研究としては本書にまさるものはない。

著者の「まえがき」にもあるように「たかだか五〇〇頁程度の本であるが、筆者としては一〇年近い歳月を費している」とあり、しかも年代も天正一八年（一五九〇）から慶応三年（一八六七）の二七八年間、件数についても二、八〇九件、村方騒動と都市騒動を加えて三、八〇四件の数におよんでいる。（黒正の『百姓一揆年表』は慶長八年（一六〇三）から慶応三年（一六八七）の二六五年でその件数は一、二四〇件があげられている。）

本書の概要をのべると、序論で「百姓一揆の歴史的意義」をのべており、第一章において「統計からみた百姓一揆」がとりあげられ、年代別・国別・藩別・形態別・内容別と分類検討され、第二章では「百姓一揆の概観」であって、むしろこの章は歴史的分析、時代区分による百姓一揆の問題がとりあげられている。二章以下はいずれも年表であって、「百姓一揆年表（二、八〇九件があげられている）」をはじめとして、都市騒擾年表は三四一件にわたり、さらに村方騒動年表においては六五四件に達しているのである。

まさに量的、質的に画期性をもった研究であり成果である。徳川幕藩体制の構造さらにその変質過程から明治維新に移行するいわゆる「封建社会から資本主義への移行過程」を研究する者にとって実に貴重な文献であり、なかでも近世の階級闘争の分析と研究に欠ぐことの出来ないものである。なお著者は本研究を基礎として明治元年（一八六八）から明治四四年（一九一一）までの、いわゆる明治期の農民騒擾を公開されたときく、このような精力的研究に対してただ敬服するものである。明治一〇〇年を迎えたこの年に幕末・明治の農民をはじめ庶民のたゆまざるたたかいの歴史を本書を通じて学ぶことが出来る。

（図書館所蔵 210.5AK）

経済学部教授　菊浦重雄

学内関係刊行物案内（一）

ほん

学内刊行物は、創立来おびただしい量に達しています。

刊行母体別にみると、学部、事務局、学生諸団体、附属研究所、外郭団体等があげられ、性格的には、商業ベースにのらないもの、部内資料といったものが中心ですから、一定の期間を経ると、部外者ではなかなか入手出来ません。これらの文献を蒐集し、広く利用者へ提供するのも中央図書館の使命ですが、今日に到るまで、この作業は不十分でした。この間の事情を知っていただくためにも、紙面でその一端をお伝えし、皆様の御協力をあおぎたい、と願っています。

今回は、学術紀要を中心に十数点、今後も目的別に逐次御紹介します。時期的には戦後を扱い、戦前、とくに井上円了先生関係はここでは扱いません。なお各部所での刊行物がありましたら、旧号でも結構ですから、図書館宛寄贈いただければ幸いです。

以上

東洋大学紀要　東洋大学学術研究会
一九四〇――　No. 1――　年刊

東洋大学大学院紀要　東洋大学大学院
一九六四――　No. 1――　年刊

貴重書から

『源三位頼政集』解説（表紙写真版解説）

源頼政は、平安朝末期を代表する武人であり歌人である。長治元年（一一〇四）に生まれ、治承四年（一一八〇）に七十七歳でこの世を去っている。その一生は、まさに源平興亡のまっただなかにあったといえる。現に、保元の乱で天皇方に味方し平家に協力した頼政は、平治の乱でも同族である源義朝を捨てて平清盛についている。ところが、依然として平家方の圧政による不遇な毎日が続く。そこで、治承四年五月、高倉宮以仁王を奉じて平家討伐に立ちあがり、ついに戦い敗れて宇治で悲劇的な最期をとげたのである。かくして、頼政の一生は、まことに劇的であったといい得る。頼政の武力に関するいくつかのエピソードが残されていることも、それを証するであろう。『尊卑分脈』が「歌人弓上手」と記していることなど、その一例にすぎない。

ところで、頼政は、『詞花集』以下に六十一首入集している大歌人である。頼政の家系をたどると、祖父頼綱・父仲政・頼政の子仲綱と、いずれも勅撰集に歌を数首残し、歌壇的にも活躍をした歌人であったことが知られる。とりわけ、頼政の作歌活動にとって、父仲政の果たした役割は、かなり大きかったろうと思われる。長明の『無名抄』に俊成をして「今の世のいみじき上手」と評せしめた頼政を思うとき、その歌才もまた武力に劣らず、すこぶる豊かなものであったろうと推察されるのである。

さて、本学図書館所蔵の『頼政集』は、寛文ごろの写、一帖。杉箱入り。綴葉装。縦二四糎、横一七・六糎。表紙は、千鳥模様を織り出した縹色の絹表紙で、原装。見返しは布目の銀紙。外題はない。箱書には、本文と同筆と見られる筆で「源三位頼政集」とある。内題も「源三位頼政集」と記されている。本文料紙は斐楮混漉の上質布目紙。紙数は、第一折七枚、第二・三折各十一枚、第四折十二枚で、計八十二丁。うち、首尾に白紙各二丁、墨付七十八丁。一面十行、和歌一首一行書、詞書三字下り。蔵書印なし。書写が何人の手にかかるかは不明であるが、奥に「写本云、元暦元年七月十二日此右大丞自筆之本書写之已従九白始之同十二日終功了干時服薬日也」とあるから、本書が元暦元年本の転写本であることが知られる。その意味でも、本書は貴重である。

組織は、春一〇六首、夏六八首、秋七九首、冬五四首、賀九首、別五首、旅五首、哀傷九首、恋二三三首、雑一一五首で、計六八三首。因みに、『頼政集』の伝本は、大別して第一類本（類従本章）と第二類本（桂宮本章）の二類になるが、本書はその後者に属すると見られる。春の部で一首、雑の部で三首の計四首を本書が欠脱していること、および本書の奥書が書陵部本と同一であることなど、その特色の一つといえる。

文学部助教授　神作光一

ほん

貴重書　書庫に移動

今まで貴重書は整理室のロッカーに保存されていたが、ながらく管理課に請求していた、特別の引戸付の書架が才一閲覧室の書庫に備えられたのを機会に、簡単な分類をし、保管された。（御覧になりたい方は才一閲覧室出納まで申し出で下さい。）

東洋大学紀要　東洋大学教養課程

教養課程　一九六三——　No. 4 ——　年刊

東洋大学教養部紀要（一九六〇——　No. 1 ——）の改題、巻次を継承

東洋大学紀要　東洋大学教養課程

教養課程篇（自然科学）　一九六三——　No. 4 ——　年刊

東洋大学教養部紀要（一九六〇——　No. 1 ——）の改題、巻次を継承

東洋大学社会学部紀要　東洋大学社会学部

一九六〇——　No. 1 ——　年刊

東洋法学　東洋大学法学会

一九五七——　No. 1 ——　季刊

比較法　東洋大学比較法研究所

一九六三——　No. 1 ——　年刊

経済経営論集　経済研究所

一九五七——　No. 6 ——　季刊

経済学論集（一九五四——　No. 1 ——）の改題、巻次を継承

文学論藻　東洋大学国語国文学会

一九五二——　No. 1 ——　季刊

東洋学研究　東洋学研究所

一九六五——　No. 1 ——　年刊

Tōyō University Asian Studies　The Institute for Asian Studies Tōyō University

1961——　No. 1「a」

他大学学術関係交換誌一覧

本学と他大学との交換誌のうち，図書館では，1967年3月現在，301大学507機関より615種を受入れ，それを総記，人文科学，社会科学，自然科学部門に分け，今回は総記のみを記載しました。なお，各研究室宛で直送される交換誌について，またこの一覧の分類記載事項及び逐次刊行物の案内についての御意見をお寄せ載ければ幸です。

（逐次刊行物係　林）

総　記

愛知学院大学論叢　一般教育研究　ir
1—14：'58—'66

会津短期大学学報　A
1—16：'53—'62

亜細亜大学　教養部紀要
1：S. 41

秋田大学　学芸学部紀要　A
2—16：'52—'66

青山学院女子短期大学紀要　S—A
1—20：'52—'66

跡見学園紀要
1—4：'54—'60

跡見学園短期大学紀要
1—3：'62—'66

麻布獣医科大学
一般教養研究報告　A
1—5：S.'58—'64

梅花短期大学　研究紀要A
3—12：'55—'63

防衛大学校紀要　A
1—12：'56—'66　欠：7—9

千葉大学　文化科学紀要　A
1—3：'59—'66

千葉大学　文理学部紀要　A
1/1—2/2：'53—'57

中央大学　学術論叢　A
8—16：'58—'66　欠：13, 14

中央学院大学論叢
1/1：'66

同志社大学　文化学年報　A
1—15：'50—'66

同志社女子大学　学術研究年報　A
16：S. 40

フェリス女学院大学紀要　A
1—2：'66—'67

フェリス女学院短期大学
フェリス論叢　ir
9—10：'64—'66

富士短期大学　文献ジャーナル　M
1/1—5/12：'62—'66　欠：2/3-5, 4/11

富士短期大学　富士論叢　A
1—11：'57—'66

福井大学　教育学部紀要　A
4—16：'55—'66　欠：5, 7—11, 15

岐阜女子短期大学 研究紀要　A
5—14：'56—'65

函館短期大学論叢　A
1—12：'53—'65

平安女学院短期大学　学報
1：'65

弘前学院短期大学紀要　A
1—2：'64—'65

広島女学院大学論集　A
4—15：'54—'65

広島女子短期大学 研究紀要　A
1—14：'50—'64

一橋大学　一橋研究　A
4—14：'58—'67

一橋大学　一橋論叢
20/1—97/4：'48—'67　欠：21/5, 27/2, 27/4—32/1, 32/3-6, 33/3, 39/4, 50/5

法政大学　法政　M
20—175：'53—'66　欠：77, 78, 92, 93, 101

法政大学　教養部研究報告　A
1—9：'56—'66

北海学園大学　学園論集　A
1—10：'56—'66　欠：7

北海道駒沢大学 研究紀要
1：'66

北海道教育大学　学術文献収報　ir
31—60：'63—'65

北星学園大学　北星論集
1—2：'63—'65

北星学園女子短期大学紀要　A
1—11：'55—'65

茨城大学　文理学部紀要　A
6—17：'56—'66

茨城キリスト教短期大学
研究紀要　A
1—6：'60—'66

活水女子短期大学論文集　A
5—9：'62—'66

実践女子大学紀要
1—9：'52—'66

華頂短期大学研究紀要　A
1—9：'57—'65

鹿児島大学　文理学部文科報告　ir
8—12：'59—'64

鹿児島県立大学
短期大学部紀要　A
5—16：'54—'66　欠：9—10

鹿児島女子短期大学紀要　A
1—2：'66—'67

海星女子学院短期大学 研究紀要　A
1—5：'56—'66

金沢大学 教養部論集　A
1—3：'64—'66

金沢女子短期大学　学葉　A
2—7：'60—'65　欠：5

関西学院大学紀要　A
1—15：'53—'66　欠：12, 13

関西学院大学　博士学位論文　A
1—5：'63—'67

関東学院短期大学 短大論集
27：'66

関東短期大学紀要　A
3—11：'57—'65　欠：8

慶応義塾大学　三田学会誌　M
49/12—60/3：'56—'67
欠：50/1-12, 51/2-5, 7, 8. 53/1, 56/2

賢明女子学院短期大学 研究紀要　ir
4—6：'62—'66　欠：5

金城学院大学論集　S—A
1—30：'52—'66　欠：20—22, 25

北九州大学　教養部紀要　S—A
1/1—3/2：'64—'67

神戸大学　博士学位論文　S—A
1—3：'64—'95

神戸大学　六甲台論集　Q
4/1—10/2：'57—'63　欠：4/4, 5/1, 6/12, 7/4, 9/2

神戸女学院大学論集　ir
1/1—13/3：'53—'67　欠：8/1—12/3

神戸女子短期大学論攷
23—24：'64

神戸山手女子短期大学紀要　ir
1—8：'56—'66

神戸商船大学　文科論集　A
4—14：'56—'66

高知大学　学術研究報告　A
1—14：'52—'65

高知女子大学紀要　A
1—14：'52—'65　欠：7

工学院大学 研究論叢（文化科学）A
1—5

皇学館大学紀要　A
1—4：'63—'66

光華女子短期大学 研究紀要　ir
2—4：'61—'65

国学院大学紀要
4—5：S. 39

国学院雑誌　M
7/1—67/12：'1—'67　欠：23/1—25/12, 37/1—38/12, 53/4, 54/24, 64/7

国際大学紀要　S—A
1/1—4/3：'63—'66　欠：3/1, 4/1, 2

駒沢女子短期大学 研究紀要
1：'66

甲南大学紀要
1：'66

甲南女子大学　研究紀要
1：'65

甲南女子短期大学論叢　A
4—5：'59—'60

熊本女子大学 学術紀要　A
9—18：'57—'66　欠：11

熊本短期大学　熊本短大論集
6—33：'52—'67　欠：14

久留米大学論叢　A
7—15：'58—'66

京都女子大学紀要　A
2—18：'49—'59　欠：3

京都府立大学　学術報告　A
11—18：'59—'66

九州大学 時報別冊　Q
18/1—32/2：'52—'66　欠：17/2-4

松山東雲学園 研究論集　A
1/1—2/2：'63—'66

松阪女子短期大学論叢　A
1—2：'64—'65

明治大学短期大学紀要　A
1—7：'57—'64　欠：4

明治学院大学　The Meiji Gakuin Review　S—A
1—3：'65—'66

明治学院論叢　M

25—125：'52—'67　欠：26, 28, 28, 35, 71, 76
明治学院　研究年報　A
1—2：'66—'67
明星大学　研究紀要
1：'65
目白学園女子短期大学　研究紀要
1—3：'65—'66　欠：2
三重大学　学芸学部研究紀要　S—A
17—34：'57—'66　欠：19, 20, 22—26
美作短期大学 研究紀要　A
1—12：'53—'67
南九州短期大学紀要
2：'65
宮城学院女子大学
研究論文集　S—A
10—28：'56—'66　欠：11—13, 15—25
宮崎大学　学芸部紀要　A
15—20：'63—'66
武庫川学院女子大学紀要　A
1—6：'61—'66
武蔵野女子大学紀要　A
1—6：'61—'66
長崎県立短期大学
長崎女子部研究紀要　A
1—13：'53—'66　欠：7
名古屋大学　教養部紀要　A
2—10：'37—'66
名古屋学院大学論集
1：'64
名古屋市立大学　教養部紀要　A
1—12：'55—'67　欠：7
名古屋女子短期大学　研究紀要　A
4—9：'54—'60
浪速大学紀要　A
1—7：'53—'59
南山大学　アカデミア　Q
1—55：'52—'66　欠：3, 4, 24
南山大学 Nanzan Review　A
1—3：'62—'65
奈良女子大学　研究年報　A
6—9：'62—'66　欠：7
日本大学　文理学部研究年報　A
1—14：'53—'65　欠：5
日本大学　三島教養部研究年報　A
1—12：'53—'62　欠：5, 10
日本大学　桜門
1—6：'58—'60
日本大学
理工学部一般教育教室彙報
6：'65
日本大学　世田谷教養部紀要　A
1—6：'52—'57
日本福祉大学　研究紀要　A
1—10：'57—'66　欠：7
日本女子大学紀要　A
11—15：'64—'65
新潟大学　研究紀要　A
5—11：'60—'67
ノートルダム清心女子大学紀要
1—3：'66
帯広大谷短期大学紀要　ir
1—3：'61—'65
桜美林短期大学紀要　A
1—6：'60—'60
お茶の水女子大学　文科紀要　A
13—18：'60—'65
岡山大学　学術紀要　Q
1—3：'52—'61　欠：3, 4
沖縄大学　沖大論叢　S—A
1/1—7/1：'60—'6　欠：2/2
大倉山学院紀要　ir
1—3：'54—'59
大倉山学院　大倉山論集　A
1—8：'52—'60
尾道短期大学　研究紀要　A
4—16：'55—'67
大阪女子学園短期大学紀要　A
1—10：'57—'66　欠：6
大阪樟蔭女子大学論集　A
1—4：'63—'66
大谷大学 研究年報　A
6—17：'53—'65　欠：15
大谷女子短期大学紀要　A
2—9：'57—'66　欠：3
大妻女子大学紀要　ir
2—4：'58—'63
麗沢大学紀要　A
1—6：'60—'66
立教大学　研究報告(一般教育部)
S—A
1—21：'56—'66　欠：19
立命館大学　大学院論集
1：'65
立命館大学
人文科学研究所紀要　A
1—15：'53—'65　欠：7, 10, 12
竜谷大学論集　ir
336—382：'49—'66　欠：339—341, 352—354, 365—367, 376
佐賀大学 教育学部研究論文集　A
1—12：'51—'64
相模女子大学紀要　A
1—26：'56—'66　欠：2, 5—7, 9—12, 22, 24
佐賀竜谷短期大学
佐賀竜谷学会紀要　A
1—11：'53—'64
西南学院大学紀要　A
1—6：'51—'56
西南女学院短期大学　研究紀要　A
2—13：'61—'97　欠：8
清泉女子大学紀要　A
2—14：'60—'66
聖心女子大学論叢　ir
4—28：'54—'66　欠：10, 12, 13, 27
専修大学論集　A
2—35：'52—'64　欠：4
専修大学論集(一般教育)　A
1—2：'65—'66
滋賀大学　彦根論叢　Q
4—40：'51—'57
滋賀県立短期大学　学術雑誌　A
3—7：'62—'66
四国学院大学論集
11：'66
四国学院短期大学論集
10：'65
信州大学　教育学部紀要　A
1—15：'51—'66
白百合女子大学　研究紀要
2：'66
白百合女子短期大学　研究紀要　A
1—10：'55—'64　欠：4
四天王寺学園
女子短期大学研究紀要　A
1—8：'68—'66
静岡女子短期大学紀要　A
1—12：'58—'61
松蔭短期大学研究紀要　A
1—6：'59—'65　欠：2
尚絅女学院短期大学　研究報告　A
1—12：'55—'66
昭和女子大学　学苑　M
1/1—328：'26—'66　欠：3/10, 11, 4/9, 7/3, 9/8, 10/12—157, 159, 161, 164, 244, 257, 358, 277, 282
相愛女子大学　研究論集　S—A
4/2—13：'57—'66　欠：6/2, 7/2, 10/1
杉野学園女子短期大学紀要　A
1—4：'61—'66
修道短期大学論集　S—A
1/1—7/2：'52—'59
立川短期大学　研究双書
1—3：'61—'65
大正大学　研究紀要　A
40—51：'55—'66
拓殖大学論集　B—M
25—55：'60—'67
北海道拓殖短期大学論集
1：'66
玉川大学　全人教育　M
32/1—41/3：'58—'67
天理大学　学報　A
13—53：
東北学院大学論集(一般教育) S—A
35—48：'39—'56
東北工業大学紀要(教養学篇)　A
1—2：'65—'66
東海大学紀要　A
1—7：'59—'66
東海同朋大学　同朋学報　A
4—13：'57—'66
東海学園女子短期大学紀要　A
1—2：'65—'66
東京大学　教育学部紀要　A
1—8：'56—'65
東京学園大学　研究報告　A
3—18：'52—'66
東京女子大学論集　S—A
1/1—17/2：'50—'57　欠：4/1-2
東京農業大学
一般教育学術集報　A
1—3：'63—'66
東京農工大学　一般教育部紀要　A
1/1—3/1：'64—'66
東洋英和女学院短期大学紀要　A
1—5：'63—'66
東横学園短期大学紀要
5：'67
津田塾大学　Tuda Review　A
9—11：'64—'66
早稲田大学　早稲田学報
4/4—21/2：'50—'67　欠：11/9, 10, 12/1-10, 13/2-4, 15/1, 17/6
和洋女子大学紀要　A
1—11：'56—'66

8頁下段へ続く

見失われた大学のシンボル

奥田道大
（社会学部助教授）

留学から帰国してしばらくのあいだというもの、米国の友人からの手紙にはかならず、図書館のいつもの席にお前をみかけないのはまことにさびしい、と添え書きしてあった。あまり勉強家といえないわたくしでも、留学当時の想い出は図書館をはなれては考えられない。朝の八時から夜の十一時までの開館で、講義以外のウィーク・デイの時間は図書館ですごすのが、米国の大学生の当然の日課である。閉館のベルとともに、重い原書を両脇にかかえ、雪に閉ざされたひろいキャンパスを家路へといそいだ想い出が、つい昨日のように新鮮である。

学年末の試験には文字どおり二四時間の開館で、深夜、ロビーに流れる音楽が、昨年はバッハ、今年はモーツァルトといったぐらいに、息抜きをもとめる学生のささやかなたのしみとなっていた。試験準備に必要な参考書はすべて特別コーナーに用意され、各担当教授の過去五年間の試験問題までリスト・アップされている。大学院学生の特権は、専用の机が提供されたことだ。論文に使用する文献で入手できなかった経験はすくなく、それにもまして魅力的なのは、レファレンス・デスクを通してテーマを提示すれば、必要にして最少限の文献をチェックしてもらえる。わが国とくらべていたれりつくせりのこのサービスも、研究と教育の機関の中心が図書館であるとの共通の認識にたてば、あたりまえのことである。大学のよしあしは、図書館によってきまる。大学への訪問客を案内する第一の場所は、例外なく図書館である。これは、施設の立派さ、蔵書数のおおさだけでなく、図書館が、大学のキャンパスのシンボルとして位置づけられ、大学人の心の拠りどころとなっているからだ。

東洋大学を正門口の階段からのぼりつめると、右側に学祖の胸像を背後にツタでおおわれた図書館がのぞかれた。わたくしにとって、この視角は、大学のキャンパスだという実感と講義前の緊張感を新たにする、唯一のシンボルであった。たしか昨年の夏であったか、図書館の改装とともに、常緑のツタは、無惨にもひきちぎられていた。わたくしは、心の中までふみあらされたような、悲しみをおぼえた。牧歌的な図書館風景を、いったん、二万人の学生を対象とした施設として現実面にうつすと、事態はあまりに深刻である。改装とはペンキの塗りかえであって、スペースそのものは、五百人の学生を対象とした当時と、寸分もかわらない。だれが東洋大学を研究と教育の場として認識し、また訪問客を図書館に案内する勇気をもちあわせているであろうか。

一縷ののぞみは、大学八十周年を祝しての記念図書館建設にある。ただこの建設計画にあたって、教員なり学生から、つよい期待と要望がうかがえないのはどうしたことか。敷地と資金だけの問題ではない。許された条件の中で、教員と学生の主体的意志をつよく反映した図書館を建設することは、キャンパスの景観とアカデミズムの点で大学以前の東洋大学に新しいシンボルを冠する、最後の好機会といえよう。ささやかな私見をのべれば、記念図書館は国連ビル風に超高層化し、上部を現在分散している各学部研究室を集中化させる。現在の研究室はゼミナール室としてそのまま利用できるが、なお、各学部研究室をひとつの建物に集中化させ、隣接科学間の交流を密に企る計画は、各国一流綜合大学で採用されている新しい方向でもある。下層の中心部が図書館で、研究室との有機的つながりをはかる。地階に学生と教師との〝対話〟の可能なロビーをつくり、スペース如何では、音楽ライブラリー、美術サロン、実習・実験室、相談室、医務室とその他各種の厚生施設をも付設させる。数年もたてば収容力の点でたちまち過密化し、景観面でもスラム化する図書館計画では、資金の効率からいっても無駄である。

在学生だけでなく、東洋大学を巣立つ卒業生が、母校を想うとき、学友と恩師とともにすごした図書館に心のふれあいがつよくえられるとき、それは、見失われた大学のシンボルがひとりひとりに新しく芽生えてきたことにほかならない。

山口大学 教育学部研究論叢
15/1-3：'66
山口女子短期大学 研究報告 A
1—20：'52—'65
山梨大学 学芸学部研究報告 A
5—16：'54—'66 欠：6, 11—13
安田学園 研究報告 A
1—8：'57—'66
八幡大学論集 S—A
10/2—17/1：'59—'67
横浜市立大学紀要
104—161：'59—'61 欠：105—112, 115—119, 121—122, 124—128, 133, 136—138, 140—145, 148—152, 154, 156—160
横浜市立大学論叢 Q
8/1—17/3：'56—'66 欠：8/4, 9/1-4, 11/3-4, 12/4, 14/2-4, 15/1, 2, 4, 16/4
米沢女子短期大学紀要
1：'66

私立大学図書館協会総大会出席報告

私立大学図書館協会第二十八回総大会が、去る五月二十七日(土)より二十九日(月)までの三日間開催された。本館からは、園田館長と山内(第二日目のみ伊藤)、工学部分館からは米山が出席した。会場は都下町田市の玉川大学で、まずその伸び伸びとした環境と新緑そして東西の箴言を掲げた碑などが我々の注目する所となった。また、開会に先立ち学生の音楽部による弦楽演奏、昼は合唱、第二日目の昼はデンマーク体操を模したと言われる玉川体操と、その演出に当っては大学の特徴を十分に発揮せんとするものであった。

第一日目は、型通りの開会の辞、挨拶、祝辞等があってから、最高は天理大学図書館の上野利一郎氏の四十年を始めとして、三十五年二名、三十年一名、二十年十四名の計十八名の永年勤続者の表彰があった。午後は総会の議事に移り、昭和四十一年度中の協会の業務報告、各委員会の報告、会費細則の一部改正案(協会費値上案)の三議案が提出されそれぞれ承認、ついで第四議案の昭和四十二・三年度役員校承認に関する件も承認された。なお、この両年度の常任理事校は早稲田大学図書館である。

第二日目は午前中は、歌舞伎俳優坂東三津五郎丈の「役者と図書館」と題する講演があった。芝居と図書館とがどこで連関をもつかと聞いていると、氏は芝居の台詞一つにもその成立年代の諸事情が反映していること、従って句読点が一つ違ってもその意味が異なることさえあると述べ、活字本のみならず、正本・丸本・原稿本などを収集する必要性を強調した。また台本の文字だけでは意味が通ぜずその台詞の調子が理解できないときは、専門の演劇研究家・国文学者に糺すだけでなく、直接古書に当り特に日本随筆索引を通して当時の随筆類などにより、その意味する所を追求するとのことであった。また氏は、個人が所有する書籍は印刷されたものに限るべきであり、原稿類など天下に又とないものは図書館に寄贈して保存をはかる必要があると述べ、事実それを実行しているとのことであった。但し、或る図書館などは寄贈した後に披覧の必要があるとき、電話すると一週間位もかかるとの返事があったといい、その図書館は死んだも同然だと中々痛い所を突いていた。午後は、玉川大学小原国芳学長の挨拶があってから、本学の天野敬太郎教授の「参考文献と世界」と題する講演と、会員の研究発表として、武蔵野美術大学図書館の大久保逸雄氏の「ふえる略語」と東京経済大学図書館の細井五氏の二つがあった。天野教授の講演は、日本の参考図書と外国のそれとを比較してその長短を述べたもので、論文集の索引や人名辞典が日本における盲点であり、用語索引などには外国のものより進んでいるものもある、とのことであった。大久保氏の発表は、略語の歴史から始まりその機能、使用の際の恣意性をその性格として述べてから、略語辞典の効用と将来のドキュメンテージョンに際して、定形化の必要に言及したものであり、細井氏のそれは、図書館を建築するに当り、館員の役割について自館建設の経験によって発表したもので、第一に大学組織上の問題に触れ、これは館員の意向が反映できるような体勢であることが必要であると強調した。また設計者との接渉に当って、スケッチ(略図)の検討とその書替えの要請、そして設計図の完成とその部分的修正に至るまで、それぞれについて館員の果すべき役割のあることを述べたものであった。

第三日目は伊豆地方の見学であった。

(Y 記)

小さい豆本図書館

静岡県藤枝市岡出山に一〇・八〇平方メートル(三・七坪)の小さい、豆本ばかり集めた図書館がこのほど開館した。これは豆本を収集していた同市の医師、小笠原淳氏が、各方面から見せてほしい貸してほしいとの依頼が多いところから、一般公開することにして、スマートな小図書館を建築、公開したもの。所蔵の本は、約千三百冊、小笠原氏が館長兼説明役、兼小使となって来訪者の応対をしているが、全国からの問合わせやら、来訪者が多いという。「世界で一番小さい図書館でしょう」と大いに誇っているが、地方都市にまことに変った特色ある文化施設ができたものである。

日本の豆本は、凸版印刷の作った世界最小の〝豆本百人一首〟、こった表装の武井豆本、あるいはえぞ豆本、越前豆本など全国各地で作られている豆本など、数多く発行されて、収集者たちに愛好されている。館長の小笠原氏は今後の方針として「これからは民族の宝となるような本を選んで収集し、さらに海外の本も集めるようにしたいと思っている」と充実をはかっている。

東洋大学図書館報告 （統計 / 昭和41年度）

本学図書館においても，各種統計を作成しております。業務報告の一端ではありますが，定期報告のため現在では図書館活動を把握する大切な資料となっています。

報告先は，日本図書館協会，日本私立大学図書館協会，文部省，学長等ですが，本学図書館の動きと直接関連のある利用者への公開は，従来あまりありませんでした。図書館ニュースの刊行にともない，今回からその主要部分を御紹介致します。処理事項は，依頼される団体によって不統一ですが，図書館と利用される方とのおかれている諸事情が，これによって計られれば幸甚です。

尚，歴年の統計は，日本図書館協会編刊「日本の図書館」（年報）に収録され，近く刊行予定の「東洋大学八十週年史」にも，創立来の統計が，若干網羅されているはずです。

41 年 度 予 算（経常費）

費目	予算額	支出額
図書費	34,750,000	34,857,816

41 年 度 購 入 支 出 明 細

費用	支出	備考
叢書，単行本	21,989,668	内国 10,889,259 外国 11,100.409
重松文庫	2,250,000	
雑誌	6,622,258	内国 2,438,288 外国 4,183,970
新聞	162,820	内国 112,360 外国 50,460
その他の資料	70,000	マイクロフィルム，テープ

増 加 図 書 資 料 表 （昭和41年度）

種別 / 区別	図書			雑誌			新聞			その他		
	購入	寄贈	計	購入	寄贈	計	購入	寄贈	計	購入	寄贈	計
内国書	6,271	432	6,703	210	505	715	8	22	30	テープ 50ヶ		テープ 50ヶ
外国書	3,198	808	4,006	294	43	337	4	3	7			
計	9,469	1,240	10,709	504	548	1,052	12	25	37			テープ 50ヶ

備考：購入図書に重松文庫含まず，雑誌，新聞はタイトル数

図 書 整 理 冊 数

分類	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	計
冊数	5,844 (156)	5,186 (324)	5,328 (226)	5,213 (879)	919 (600)	262 (2,465)	827 (128)	400 (208)	565 (79)	1,937 (561)	26,481 (5,626)

備考：分類はN. D. C（日本十進分類法）による （ ）内は工学部

マイクロ・エレファックス・ゼロックス業務表

申込者数	収入額	支出(消耗品)額
1,819	732,865	634,565

備考：ゼロックスは $41\frac{1}{9}$～$42\frac{2}{3}$ 月まで

製 本 冊 数 表（自館製本）

期間	作業日数	冊数
41. 4. 1～42. 3. 31	111	1,795

図 書 館 利 用 統 計

学部別 / 種別	文学部	経済学部 経営学部	法学部	社会学部	短大	大学院	小計	教職員	その他	小計	総合計
館外貸出利用者数	2,837	1,198	843	1,106	1,156	94	7,234	847	4	851	8,085